

氏 名	つづ い ゆう 筒 井 裕
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 316 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 文 化 ・ 地 域 環 境 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	山岳を祀る神社の運営組織とその信仰圏に関する研究 ——近現代の山形県大物忌神社を事例として——

論文調査委員	(主 査) 教 授 山 田 誠	教 授 伊 從 勉	助教授 小 方 登
--------	--------------------	-----------	-----------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、山形県北西部の鳥海山（海拔2236m）を神体として祀る大物忌神社を取り上げて、近現代におけるその運営組織と信仰圏の構造を解明しようとしたものであり、5つの章と補論2編、参考文献一覧、附録から構成される。

第1章「本研究の視角・課題・方法」ではまず本論文の対象と目的を記している。対象は鳥海山を祀る山岳信仰の神社である山形県大物忌神社（山頂付近の本殿と、山麓2カ所の「口ノ宮」[里宮]から構成される）であり、目的は、1）近代期に修験者達（社家集団）が神社とどのような関係を有していたのか、2）神社の信仰圏の形成に修験者達がどうかかわっていたのか、3）崇敬者の分布や行動に地域差が見られるのはなぜか、言い換えれば信仰圏の構造を規定する要因は何か、の3点を明らかにすることである。次いで、これらのテーマに関係する地理学、民俗学、日本史学、神道学等の先行研究について簡潔に紹介・論評している。こうした先行研究の整理の中から、神社が国家によって組織化された近代日本における修験者と神社の関係については必ずしも明確とはなっていないこと、地理学分野での信仰圏研究は、近年、岩鼻通明、松井圭介らによって進展が見られるものの、なお解明すべき点が残されていることが指摘され、上記の研究目的が再確認される。さらに、これらの目的を達成するための方法として、申請者が自ら整理を行った大物忌神社吹浦口ノ宮所蔵資料の分析と、信仰圏内の諸集落等での聞き取り調査の結果を併用することを記している。

第2章「近代の大物忌神社の組織内における社家の勢力」は、上記の3つの目的の内の最初の点をもっぱら扱う。ここでは、大物忌神社吹浦口ノ宮所蔵資料の分析を通して、1）制度上は1つの神社とされたにもかかわらず、近代期には吹浦口ノ宮ともう1つの口ノ宮である蔵岡口ノ宮の間の対立が一貫して存在したこと、2）明治中期に起こった修験者2名の神職としての職階上の処遇をめぐる両口ノ宮間の対立と、大正期に起こった式年造営の担当をめぐる両口ノ宮間の対立の2事例から、この神社の最高責任者であったはずの官司（中央から任命された官吏）が、部下の修験者達を十分統御できず、神社運営の実権のかなりの部分をむしろ修験者の側が握っていたこと、を明らかにした。

第3章「山岳信仰の神社における講組織の形成—鳥海講を事例に一」は、昭和戦前期に「鳥海講」が新たに組織されたことの背景として、神社財政の逼迫（とりわけ神社建造物の修理・建て替え資金の不足）が存在したことを、資料によって裏付けるとともに、それが組織された地域的範囲をも明らかにした。さらに、講創設の発案者は他地方の神社から異動してきた新任の官司であったものの、信仰圏内の各地の村落で勧誘活動を行うなど講創設の実務に携わったのはもっぱら修験世帯出身の神職であったことを、これも資料の分析から確認している。この章は、第1章で設定した本論文の3つの課題の内の2番目と深くかかわる。

第4章「大物忌神社の崇敬者の行動にみられる地域的差異とその形成要因—講組織を中心に—」は、本論文の第3の課題、すなわち信仰圏の構造の解明に正面から取り組む。平成期における大物忌神社崇敬者の行動の状況を、とくに「登拝講」と総称される組織に焦点を当てつつ綿密なフィールドワークによって描き出すとともに、そうした状況が形成されてきた過程についても、吹浦口ノ宮所蔵資料の分析を通して論及している。その結果、1）鳥海山信仰圏の内部は6つの類型地域に区

分できること、2) それらの形成要因としては、地形、気候、水文といった自然条件に加えて、競合する山岳信仰対象としての出羽三山との位置関係、さらには鳥海修験者の布教活動状況などが重要であること、3) これら諸条件の存在のため、鳥海山信仰圏は、従来の信仰圏研究が前提としていたような同心円の構造を示すことなく、モザイク状を呈していること、などの点を明らかにした。

第5章「本論文の成果と今後の課題」は結論に当たる部分であり、前章までで得られた知見を再度提示するとともに、さらに今後研究を深めるべき課題を列挙している。

補論Ⅰは、夏季に神職が交代で泊まり込む、鳥海山山中の大物忌神社の3つの施設（本殿、鳥ノ海御浜神社、箸王子神社）で必要となる諸物資が、ヘリコプターが利用される以前には、誰によって、どのように運搬されたのかを、作業経験者からの聞き取り調査と資料分析を併用して明らかにした。神社の運営組織の一端を解明することが目指されており、本論文の第1の課題を補強する。

補論Ⅱは、明治期における本地方の漁民の鳥海山信仰の一端を、吹浦口ノ宮所蔵資料の分析を通して描き出している。本論文の中心テーマからはやや外れるが、いわば本論文を完成させていく過程での副産物という性格をもつ。

附録は大物忌神社吹浦口ノ宮所蔵資料4,000点余の目録である。ここでは資料群を「綴帳」・「大判」・「絵図」・「祝詞」の4種類に区分し、それぞれについて作成年代順に整理している。

論文審査の結果の要旨

日本の山岳信仰については、民俗学、日本史学、神道学、人文地理学等の分野でかなりの研究成果が積み重ねられてきた。申請者はそれらの成果を検討する中で、1) 山岳信仰の神社の近世における運営組織についてはかなりの研究がある一方で、近代については神社が国家神道に組織化されていったという側面のみが強調され、その運営実態について十分な研究がなされておらず、とりわけ修験者の位置づけが不十分なのではないか、2) 民俗学者の宮田登が提起し、岩鼻通明などの近年の宗教地理学研究にも引き継がれた信仰圏の同心円の構造モデルは、必ずしも実態を正しく示してはいないのではないか、等の疑念を抱くに至った。そこで、1) 修験者達は近代期に神社とどのような関係を有していたのか、2) 彼らは信仰圏の形成にどうかかわっていたのか、3) 崇敬者の分布や行動に地域差が見られるのはなぜか、換言すれば信仰圏の構造を規定する要因は何か、の3点の解明を本論文の課題として設定した。たしかに、これらを追究することによって先行研究の大きな欠を補うことが期待でき、また先行研究の結果に重大な修正を迫る可能性も存在するなど、本論文の課題設定には大きな意義が認められる。

申請者の立脚点は宗教地理学にあるが、本論文の課題は、テーマの学際性ゆえに地理学の方法だけでは解明しきれない。そこで申請者は、大物忌神社吹浦口ノ宮所蔵資料（絵図も含まれるが、大半は文書・記録類）を丹念に分析するという歴史学的方法を併用することによって、上記の諸課題に迫ることとした。申請者は大物忌神社から依頼を受けて未公開資料の整理に当たり、その見返りとして、それらを研究に利用することを許された。

申請者が本論文において明らかにしたことがらの大略は以下の諸点である。

第1の課題については、近代の大物忌神社で生じた2つの内部対立の事例から、この神社の最高責任者である宮司（内務省任命の官吏）が部下の修験者出身の神職を十分統御できず、神社運営の実権の相当部分はむしろ修験者に握られていたことを明らかにした。これらの対立の状況については、神社にとってあまり名誉なことではないためか従来紹介されていなかったものであり、その事実を掘り起こした意義は大きい。この2事例から近代の神社組織における二重構造を論証する過程は、本論文の圧巻とも言うべきものである。

第2の課題についても、昭和戦前期における「鳥海講」の形成過程を神社所蔵資料に基づいて描き出すことに成功した。同講創設の発案者は中央任命の宮司であったものの、集落での勧誘などの実務はもっぱら修験世帯出身の下級神職が担っており、そのため彼らの以前からの活動範囲が「鳥海講」の範囲とも重なっていったことが判明した。

第3の課題については、一部に神社資料も用いられてはいるものの、むしろフィールドワークに基づく聞き取り調査の結果が中心となっている。ここでは、大物忌神社信仰圏内のいくつかの組織の中で「登拝講」と総称されるものに着目し、集落ごとのその名称・内容等の違いによって、信仰圏内部が6つの類型地域に区分できることを明らかにした。さらに、それ

らの空間的パターンが決して同心円状を示さないことを主張する。これをもって同心円構造モデルを全否定することはできないにしても、従来と全く同心円構造モデルを前提とするような議論があったことに警鐘を鳴らすものとして評価できる。

このように申請者は、自ら設定した3つの課題の解明にかなりの程度に成功しており、そのことは高く評価することができる。取り上げた事例は1つの神社に限られてはいるものの、そこで明らかにされた事実のかなりの部分は、他の山岳信仰の神社にも当てはまるものと思われる。

本論文には今後の課題として残された点もいくつか存在する。たとえば、本論文で用いられた資料は、大物忌神社の2つの口ノ宮の内、吹浦口ノ宮に所蔵されるものである。吹浦口ノ宮と蕨岡口ノ宮の対立に言及するからには、一方の資料だけによるのではなく、双方の資料を比較しながら実態の解明を行うことが求められるであろう。この点について申請者は、すでに蕨岡口ノ宮所蔵資料の整理・利用の許可を神社から得ており、遠からず新たな展開が期待できよう。また本論文は、神社の運営面や、村落としての神社あるいは鳥海山へのかかわりの面については解明できたものの、信仰圏内の個人による信仰の在り方、言い換えれば彼ら一人一人が鳥海山をどのようなものととらえているのかといった、いわば信仰の本質にかかわる点については、必ずしも踏み込んだ議論をしてはいない。

これら今後に残された課題の存在にもかかわらず、本論文は、山岳信仰に由来する神社の研究に一石を投じるものとして宗教地理学や民俗学、さらには他の山岳信仰に関連する諸学問にも大きな影響を与えることが予想され、博士の学位論文として十分な水準に達している。またその内容は、人間と環境との関係を新たな視点から究明しようとしている本研究科、とりわけ申請者が学んだ文化・地域環境学専攻にふさわしいものと言える。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年1月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。